

日印交流年への招き

野 田 英二郎

(2007 年 5 月 7 日、国際基督教大学にて講演)

今日は、最初に「2007 年日印交流年記念行事」についてお話します。次に、「インドを理解する努力」について説明します。お配りした資料を見ながら説明を聞いて頂きたいと思います。

先ず日印交流年についてです。もう一昨年になりますが、2005 年の 4 月に当時の小泉純一郎首相がインドを訪問し、今でも首相をやっているマンモハン・シン首相と共同声明を発表して、その中で、文化・学術交流、人と人との交流を強化しようということを謳いました。今年 2007 年は、ちょうど日本とインドとの間の文化協定締結の 50 周年にあたりますので、これを記念して、インドにおいて日本の政府と民間が協力して、文化交流行事を開催することとなり、今 2007 年の 1 月から始めています。インド側も日本で数多くの行事を行っており、これについては去年の 12 月に、マンモハン・シン首相が来日し、インド側行事の開始を宣言し、インド舞踊のショーなどを催しました。その時には安倍首相夫妻もみえました。

日本側が企画しているインドにおける行事は、主として外務省と在外公館が催すものですが、文化庁の助成の事業もあり、また国際交流基金主催の行事もあります。それから民間の企業で構成する実行委員会の募金に応じて拠出された寄付金を資金として実施する事業もあります。その他観光振興も考えられており、先日も冬柴国土交通大臣がインドへ行き、観光振興に関するいろいろな催しもすることになりました。これがこの事業全体の構成です。

日本がインドで行う行事の基本テーマは、『仏教伝来から現代に至るまでの日印の歴史的・文化的紐帯とその発展』です。これは、時代と距離を超越した精神的・文化的な紐帯が両国間に存在することの意義を再確認するとともに、現代における経済、科学技術を含む両国の協力の重要性を強調することです。

アジアの地図を見れば分かることですが、インドの文化は、いきなりヘリコプターで日本に來たわけではありません。インドの仏教その他の文化は中央アジアを通して、シルクロードを通り、中国から日本に來た、あるいは一部は朝鮮半島を通して來ました。文化というのは「流れ」です。いかなる地域の文化も、そこだけで孤立して成立するということはありません。玄奘三蔵という中国の偉大なお坊さんが、インドへ行きまして仏典を研究し、多くの

仏典を携えて長安の都に戻って、その仏典を中国語に訳した。それを日本から行った遣唐使に随行して中国に赴いた日本の空海や最澄を含む学徒が、中国語に翻訳された仏典を持ってきて日本に伝えた。このような文化の「流れ」の恩恵が今に及んでいるわけです。仏教が最初に（韓国の）百済から日本に来ましたのは6世紀ですから、それ以来今日に至るまでの非常に長い期間、日本はインドから文化的影響を受け続けてきているということです。仏教を通していろいろなインドの神様も、日本に来ておられます。毘沙門天とか、帝釈天とか、大黒様とか、鬼子母神とか、吉祥天とか、みなインドの神様です。このような、仏教の伝来から今日に至るまでの歴史的文化的なつながり、文化の伝承は、時代を超えて非常に重要な意味があります。それを再確認するのが第一点。それからもうひとつ、戦前戦中にひき続き、わが国はインドとの経済交流を続けてきましたが、最近のインドはITその他大きく発展しており、交流も増大しています。その現状を分析し、今後の発展への展望を持ちたい。これが第二点。この二つが、日本がインドで催す2007年の行事の基本テーマです。

実行委員会の委員長は日印経済委員会の大橋会長にお願いし、民間企業からの募金をしていただいています。委員会の名誉顧問は日印協会の会長である森喜朗元総理です。更に顧問としまして、中根千枝先生。文化人類学の権威で、1950年代にインドに行ってフィールドワークをされた方ですが、日本とインドとの間の相互交流・相互理解、それがいかに難しいかということをお話していただきました。それからもう一人は、平山郁夫先生。平山先生は、玄奘三蔵及びシルクロードの権威で、先ほど申しあげました文化の流れとすることを是非お願いしたいと思っています。このおふたりによる基調講演の意義は大きいと考えております。また、1月から12月まで、いろいろな行事を企画しています。特筆すべきは今年の3月3日に観世流のお家元の観世清和さんにお能を公演して頂いたことです。実は私が1987年にインドに在勤していた当時にも、観世流の先代お家元の観世元正さんにお能の公演をして頂きましたが、インドの知識人には、お能のような哲学的なものが高く評価され、ずばぬけて新聞やテレビの報道が多かったのです。それでまた今度も観世流の家元さんをお願いして、お能の公演を実施して頂き、予想どおり非常に好評を博しました。

年間を通じての基幹の行事は、1月から12月まで、「連続講演会」を開催することです。この企画では、たとえば、森本公誠・東大寺別当に「東大寺と菩提僊那^{ぼだいせんな}」と題し、インドの高僧菩提僊那が奈良の東大寺で貢献されたことについてお話しいただきました。それからインド哲学の前田専学先生には「インド思想の日本的定着」と題し、また、駒沢大学の奈良康明前総長には「インド説話文学の日本への導入」と題し、それぞれ講演していただきました。お配りした資料をごらんください（21-22頁）。また年末に近くなりますが、日本の物づくり技術のインドへの貢献につき、静岡のスズキの鈴木修会長にお話し願うことになっております。以上が今行われています日印交流年の行事の概要です。

次に、今日のお話の第二の項目、「インドを理解する努力」に移ります。

1998年の5月にインドが核実験をした時に、日本では、世界唯一の被爆国としての国民

感情から無理もないことではありますが、インドはけしからん、けしからん、という強い世論が盛り上がりました。これはいかにインドが嫌いな人が日本では多いかということを示しました。それは、インドのお国柄を日本人が理解するのは易しいことではない、相当の努力を要するということです。日本の我々からみて、インドのお国柄・国民性には、わかりにくい面があることを認識すべきだと思います。

インドの国柄といえば、地図を見ればおわかりのとおり、インドの国土の広さは、だいたい日本の9倍です。南北3,000km、東西3,000km。それで海岸線は7,500km。非常に大きな国なのです。それから人口が、だいたい10億と言っており、日本の9倍と思えばいいです。国土が大きいだけに気候や風土も多種多様です。例えば動物は、6万5千種います。これは昆虫や爬虫類や鳥類全部入れている話ですが。それから植物は、だいたい4万5千種です。ひとつの国にこれだけたくさんの種類の動植物が住んでいる例は、世界でも他に例がない。インド国内の気象については、世界で最も雨量の少ない地域もありますし、世界で一番雨量の多い地域もあるのです。ですからインドの自然は非常に豊かな多様性をかかえています。その中に、いろいろな民族が住んでいる。主にアーリア系とドラヴィダ系がありますが、だいたい大きく分けて7種類くらいの民族が住んでいる。それから言葉は、種類が非常に多い。憲法には、連邦の公用語はヒンディー語だと書いてあるのですが、ヒンディー語が全国で通じるわけではない。地方の公用語と言うのは17あるのです。今日は持ってきてみませんが、インドの紙幣には地方のこれらの公用語の言葉がならべて書かれている。インド全国に通じる言葉は英語だけなのです。今、地方の公用語が17あると申しましたが、100万人が話す言葉として区切ってみても、全部で33あると言われている。もっと小さなグループを合算すればもっと多い。それくらい言語が多様です。それから宗教も多様です。およその数でいえば、ヒンドゥー教が80%以上で、イスラムが11%です。キリスト教は3%。それからシークは2%。インドは仏教発祥の地ではあるのですが、仏教は今もう、ほとんど実践されていません。0.7%程度です。いずれにしても、インドの自然も国民も、日本人の想像を絶するほどの多様性をかかえているということを認識しなければなりません。

そういう複雑な国が1947年に独立してから、既にもう60年統一を保ってきました。貧富の差も大きい。インドには1日1ドル以下で暮らしている人が人口の34%程度いるのです。そういう国が、国の統一を保っているということは、驚くべきことだと思うのです。その背景としては、イギリスが民主的な議会制度というものを残しました。連邦議会がありますし、各州にはそれぞれの議会がある。そういう民主的な議会政治制度が機能している。官僚機構も非常に立派に構成されて機能しています。それから司法。裁判所の制度もイギリスの残したものが機能しています。更に軍隊も、イギリスの陸海空軍の伝統をそのまま残して、政治的に中立なのです。バングラデシュやパキスタンでは、平和的な政権交代ではない、軍事クーデターが度々起きていますが、インドでは独立以来、軍事クーデターは一度もありません。軍人は全く政治的に中立を保っている。これも賞賛すべきことだと思います。

インドでこのように統一が維持され、国がばらばらにならずにやってきた要因には、議会制度や官僚機構などがしっかりしていることなど、制度的な面もありますが、一番大きな要因は、私の見るところでは、国民性・生活様式であり、更に言えば、人口の約 20% を占める知識層の力です。相当程度の教育を受けた人がインドには約 2 億人いるといわれており、この人達が、非常にハイレベルな知的風土を形成しています。私はインドで在勤していた時に、幸運にも多くの友人に恵まれました。今でも電話で話すような友人がたくさんいます。このような知的風土の知識層がインドの民主主義社会を支えているのです。

そこで、インドの国柄と民族性について更に詳しくお話したいと思います。インドの首都ニューデリーで私は連邦議会の討議を傍聴したことがあります。それからインド人同士が議論しているのを見たことも屡々あります。日本との比較になるのですが、今申し上げたとおり、民族も宗教も言語も雑多です。ですから、インド人というのはお互いに相手が自分とは異なる意見を持っていることが当然だと考え、それを前提に話し合っているのです。だから、AさんとBさんが話している場合、お互いに擦り寄らない。日本人はすぐ擦り寄ってしまう。同意しているのか同意していないのか分からなくなってしまう。インドの人は絶対に擦り寄らない。そもそも合意しなくてはいけないと思って議論しているのではありません。お互いの意見が違うということをはっきりさせるために議論しているとすら思えるほどです。違いがはっきりすれば、それぞれスッキリした気分になってサヨナラとなる。意見が違うから感情的になるなどということは、私は見たことがありません。精神衛生からいえば非常に健全な国だと思うのです。従って、われわれもインドに行ったらインドの人と議論する場合は、徹底的に自分を主張すればよい。主張したからと言って、相手にしこりが残るとか後で感情を悪くするとか、そういった心配は全く不要です。もっとも、よく考えてみますと、世界中でインドだけがそういう国だと思ったら、それもまた間違いだと思うのです。たとえばヨーロッパの人々もインド人たちとあまり変わらないと思います。コンセンサスを性急に求めたり、世論の一致を強く望む傾向がある点では、むしろわれわれ日本人が世界の例外かもしれません。日本では、全体の雰囲気迎合したりして、何とか雰囲気が一致すればいいと思いがちです。私はそれが日本に民主主義がなかなか根付きにくい原因ではないかと思うほどです。日本のことを言うのは今日の目的ではありませんが。インドの安定した民主主義を支えている最大の要因は、このような多様な意見を包みこむ寛容な知的風土であると思います。

インドの国内でインド人同士が論議を活発に行う傾向について説明しましたが、インドの政府が対外的に自己主張をする姿勢も全く同様です。日本では、すぐ国際世論がどうこうだと言って、NO と言ってはいけないと思ひこんで、たまに NO と言う人がいると新聞の記事になるくらいです。しかしインドの人は独立以来、ずっと自主独立の自分の考えを持って、それを主張してきました。インド人は必ず冷静に自分の意見を論理的に表明し、絶対に感情的にならないのです。自分の主張を 120% 言いますから、相手も誤解しようがないので

す。これは人一倍正直だと思うのです。日本の場合は、言いたいことを言わないで後でぶつぶつ言ったり、言いたことが全部伝えられなかったなどと言ったりする政治家がいっぱいいるけれど、インドの人はまずそんなことはないのです。これはインドを外交的にますます有利にしている理由のひとつだと思うのです。

具体例をあげれば、例えばアメリカとインドの関係は、ますます良くなっています。先ほど申し上げたとおり、アメリカから見ますと、インドは一番言うことを聞かない国だと思われるかもしれない。イラク戦争にも、当初から反対で一貫しています。しかしインドの考え方は少なくとも誤解されてはいません。また個人と個人の間では、インドはアメリカと極めて親密です。私の知っているある程度教育のある家庭で、息子さんと娘さんがアメリカの大学に行っていない家は殆どないと言ってよいほどです。アメリカの病院とインドの病院、アメリカの大学とインドの大学、そういう *institution* 同士の協力が非常に密接なのです。これは昔からそうなのです。特に最近、IT が世界を席捲するようになりますと、インド人の進出は目ざましい。IBM などは、もともと技術者の 40% がインド人だそうです。インドとアメリカとは時差が 10 時間以上ありますから、例えばニューヨークの銀行が毎日の午後 4 時か 5 時に終わりますと、その時に出了たデータをインドに送ります。するとニューヨークが寝ている間に、インドの技術者が安い人件費でデータをグラフ化し、翌朝ニューヨークのアメリカ人が起きてくると資料が届いています。ニューヨークが働かなくても、寝ている間にインドが働いてくれる。こういう時差を利用した便益もありまして、アメリカとインドの協力関係は非常に緊密です。アメリカはインドにとって最大の貿易相手国です。事実上、インドは核兵器保有国になってしまいましたが、アメリカの原子力産業が原発を売り込みたいとの意欲もあり、米印の間では原子力平和利用に関する協定がむすばれました。これが批准されて発効するまでには問題があります。というのは、インドはやはり絶対に核実験の権利を放棄しないと言うことで頑張っているからです。このように米印関係は表向きは意見の衝突が屢々ありますが、やはり全体的な関係は円滑に動いています。インドの教育のある人にとって英語は自国語と同じで、全く不自由ありません。これも米印関係が緊密化している大きな要因でしょう。

中国とインドは、インドが独立した時には周恩来とネルーの結びつきがあり、関係が非常によかったのですが、国境で戦争がありましてから、1961-62 年ごろ、関係は非常に悪くなりました。しかしその後だんだん良くなってきて、特に私がインドにおりました時には、ラジヴ・ガンディー首相が中国に行って、関係が大きく改善されました。以前はソ連がインドを支援する、アメリカがパキスタンを支援するというようなことがあって、ソ連とインドの関係は密接だったのですが、ソ連が崩壊して以後、ゴルバチョフ政権の頃から、ラジヴ・ガンディー首相は、ソ連との関係を主として経済的な関係に限定しようということをはっきり言うておられました。国益を踏まえた現実外交の中で、中国とインドの関係も良くなっていったのです。そしてソ連との関係もまた最近非常に良くなってきました。現在、イン

ドとソ連と中国の三国間で、主としてエネルギー問題に関連して非常に密接な意思疎通の関係ができております。これは政治的な同盟というわけではなく、三国それぞれ国益をふまえて具体的な案件で協力し合う形になっているようです。この中国との関係については、インドの外務省の出身者で、中国大使とフランス大使を両方経験なさったランガナタンという中国の専門家がいます。彼が書いた本を読みましたら、中国とインドはお互い理解しやすいということが書いてありました。先ほど申し上げましたとおり、インドは非常に大きな複雑な国で、民族も違えば地域差も大きい。しかし歴史が古くて文化がある。中国も言ってみれば似たような性格があるのです。例えば北京の人と南方の人ではまるで外国人のように違います。非常に複雑で、日本では考えられないほどの多様性があるのです。複雑な国であるという点では、インドにとって中国は一番国情が似ているのです。似ているということは、どういう困難があるかということをお互いに理解し易いということです。このことを私は色々な友人との接触を通じて実感しておりますが、非常に重要な問題だと思うのです。インドは大国だと思いますし、それから中国も大国だと思うのです。アメリカやロシアもそうです。インドはまさに典型的な意味で、少なくとも知的な大国だと思うわけです。印米関係や印中関係を見ると、大国同士は波長が合うということではないかと思わざるをえません。

これからインドはどうなるのでしょうか。世界が文字通り多極化してゆくとすれば、大変知的水準の高い中間所得層に支えられた民主主義国家のインドというのは、これからますます有利な地位を占めるだろうと思います。これはやはり、自分で自分の手足を縛らない行動の自由をすでに持っているからなのです。行動の自由を持っているので、ひとつの極になりうると思います。

インドのことを知れば知るほど、結局日本との比較になります。皆さんご存じの評論家の加藤周一先生が書かれた本の中に、富永伸基という広辞苑にも載っているような有名な学者の話があります。1800年代、江戸中期の大阪の学者です。富永伸基はその著書の中で、インドの仏教的文化、中国の儒教的文化、日本の神道的文化を、古典の研究を通じて比較しています。それによりますと、インドと中国と日本を比べますと、それぞれ癖がある。インドの癖は何かという、物事を空想する癖がある。それから中国の癖は誇張することだ。それから日本の癖は何かと言うと、富永伸基が言っているのは、隠すことで、三つの癖のうちで一番程度の低い癖だと言っています。これは注目してよい指摘だと思うのです。

次に日本とインドとの関係を振り返って簡単に申し上げます。インドがまだイギリスの植民地だった頃、終戦まで、インドは日本の紡績業に対する綿花の供給源だったのです。ですからボンベイ、今のムンバイ、このあたりで日本の企業が技術指導をして、インドで良質の綿花を栽培し、それを大阪に持ってきて日本の綿紡績に原料を供給していたのです。それから戦後、日本が復興する時に、日本の鉄鋼業に対する鉄鉱石の主たる供給源も独立したインドでした。また日露戦争の時に、日本がヨーロッパ人に勝ったということで、イギリスに植

民地支配を受けていた当時のインド人が日本を尊敬したということもあるのです。ということで、インドでは世論調査をしますと、以前から日本に対する好感度、日本のイメージは大変いいのです。このことは日本ではあまり知られていません。

こうした経緯もあって、インドと日本の関係はよかったのですが、インドの核実験の時に日本の世論が非常に悪くなりました。このことは、さきほど言及しました。インドの核実験は、私が役所を辞めた後でしたが、当時、東京の大使館に勤務していたインドのある外交官が私に言ったのです。「日本がインドの核実験をけしからんと言うのは分かります。広島・長崎で原爆を投下されたから。けれどもインドは独立以来、原子力について色々な研究をやってきた。特に中国が核兵器をもっているのに自国にないのは不平等であるという気持もある。このインドが核実験をすることに対して、日本は、けしからん、けしからんと言うけれども、インドに言わせれば、インドには核の傘をさしかけてくれる国はない。頼んだが断られた。日本はアメリカの核の傘に守ってもらっているじゃないか。自分で核兵器を持っているのと、アメリカの核の傘をさしかけてもらって現実に核兵器の利益 *benefit* を受けているのは、実際には同じだと、インドとしては考えている。しかも、インドは高いランクの人を特使に任命して各国に派遣し、何故核実験をしたかを説明して回った。ところが日本だけ、その特使を受け入れることさえ拒否した。意見が違えば違うほど、お互いの意見をぶつけ合うことが必要だと思う。経済協力もすべて停止した。これほど関係を冷却させて、日本はこれから後、どうするつもりですか？」と個人的意見として批判されました。たしかに、このような硬直した対印非難の強硬姿勢は賢明ではありませんでした。日本の政界の人々は、日本からの有償無償の経済援助を停止されて困るのはインドだから核実験をやめまうと言うても思っただけでしょうか？ ところがインドが核実験をやめると宣言することは絶対あり得ない訳です。インドは原子力の利用というものについては、平和利用にしろ何にしろ、独立以来考えています。独立するときの最初の総理大臣、ジャワハルラール・ネルー首相はケンブリッジの卒業生で、ケンブリッジでは原子物理を専攻していました。他の国から言われたからといって、アメリカから言われようが、日本から言われようが核兵器持つのをやめまう、核実験中止を致します、なんて言うはずもなかったわけです。ほとんど感情的な対印非難を、多くの国際会議の場で、何度も繰り返したのは、実は日本だけでした。インドの核問題について、日本が気がついたときには孤立していました。アメリカは（日本に対印非難をやらせておいて）、たった3カ月の内に中西部からの支援の農産物をインドに出しています。そういうことは日本の新聞にあまり載らないです。いずれにせよ、インドの核実験への対応の拙劣さは、日本の外交のひとつの失敗例だったと認めざるをえません。

インドについてご説明するのが今日の私の使命ですけれども、インドのことを考えれば考えるほど、インドの *behavior* を見れば見るほど、日本との差異、日本との違いについてどうしても考えてしまいます。残念ながら、日本はインドよりも外交が下手だと思わざるをえません。よそから批判をされると感情的になるほうが先に立ってしまって、物事を論理的に

説明しない。インドの人は絶対感情的にならないで論理的に説明しますから、相手も誤解のしようがない。これらのことでは日本はインドに学ぶべきだと考えます。

もう一つ、核実験のことについて付け加えますと、日本は唯一の被爆国であり、被害者の立場として、インドの核実験に反対するのは当然だと思います。私も個人的にはインドは核兵器を持たない方がいいだろうと思います。そうは思いますが、よその国に向かって聖人君子みたいに、核実験した国はけしからん、けしからんと言うのも、いい加減にした方がいいと思うのです。なぜかという、日本自身も戦争中は、自分で原子爆弾を一生懸命作ろうとしたじゃないですか。お金が充分なかったから出来なかったのです。あの時日本が原爆を一発でも作っていれば、恐らくアメリカへ落としたでしょう。東大の理学部の仁科芳雄博士が、陸軍から核兵器を作れと言われて研究室をたちあげたけれども、作れないまま終戦になってしまった。日本も原子爆弾の加害者になりえたのです。およそ国際政治の問題で聖人君子みたいなことを言わない方が賢明ではないかと思います。

結論として、今日のお話のポイントは、我々がインドから学ぶことは非常に多いということです。インドと交流し、学ぶ所の多い国だということを大勢の日本人が理解すれば、それは日本にとっての利益になるでしょう。インドは全体としてみると、知的レベルが非常に高く、国際的な behavior も非常に mature な国だということを念頭におくことは、日本にとっても必要だと思います。

あれやこれやになりましたが、先ほど配っていただいた資料のなかに、今度の5月17日に郵政省が発売する50周年記念切手の案内があります(16頁参照)。

最後に、もうかなり前になりましたが、1998年の日本経済新聞の夕刊の「あすへの話題」欄に、インドに学ぶというテーマで書いたことがあります。これは今申し上げたようなことが書いてありますので、お暇があったら読んでいただきたいと思います。

インドに学ぶ

野田英二郎

かつて勤務した様々な国の中で、とりわけインドからは多くを学んだ。民族も宗教も言語も多様性そのもののインドでは、一人ひとりが意見を持ち、それを表明することを当然のこととする。意見の交換が「ノー」で始まるのはむしろ普通であるので、意見の相違のゆえに感情的になることもほとんどないという寛容な知的風土がある。

「国際世論」に対しても、最初に「ノー」と言う場合が「イエス」と言う場合より多いが、冷静に論理的に自国の立場をあいまいにせず説明するから、相手方も耳を傾ける。双方の一致点と相違点も整理される。

我が国はどうか。国内では、まず意見の一致がよしとされ、論争自体がなじまない。「智に働けばかどがたつ」と漱石も「草枕」で言っている。一定方向の考え方が、たとえ具体性に乏しくとも大勢を制すると、少数意見は凍結され、思考停止に陥ることも珍

しくない。世界の中でも例外的なほど国論が統一されやすい国であろう。

これは戦前・戦中とあまり変わらない。現在の「政治不信」も「金融不安」も過剰反応の潮流になっては、健全ではあるまい。

終戦五十年の村山首相談話に我が国はかつて「国策を誤った」との言葉があった。しかし、国策の誤りもさることながら、国家目標について十分な説明も論議もなく、どちらかに風が吹くとその方向に国民が右へならえをしたことにこそ、戦前の日本の問題があったのであり、この傾向は今日でも依然たるものがある。

対外的にも、先進国の「国際世論」に対しては、初めから「ノー」と言って議論してはならないものと思い込んでいるかのごとくである。物事をあいまいにするので、かえって不信感を持たれる。

日本は「普通の国」になるべきだとの主張があるが、社会と個人の関係という点ではインドの方がはるかに「普通の国」に近い。インドに学んでよい所以である。

(元インド大使)

(1998年1月14日 日本経済新聞夕刊「あすへの話題」に掲載)

(1) みほん



(2) みほん



(3) みほん



(4) みほん



(5) みほん



(6) みほん



(7) みほん



(8) みほん



(9) みほん



(10) みほん



2007 年日印交流年記念切手

- (1) タージ・マハル：ムガル帝国王妃の白亜の霊廟で1983年に世界文化遺産に登録されました。大理石に宝石等が散りばめられた美しい建物で、イスラム建築の至宝ともいわれています。
- (2) ラクダとタージ・マハル
- (3) ベンガルトラ：インドを中心にアジア各国に生息しており、トラの中では2番目に大きい種類です。密猟や森林伐採などにより生存が脅かされており、1992年現在、世界に3,400頭とされています。
- (4) インドクジャク：インドの国鳥で、毒虫等を食べるため益鳥として尊ばれています。邪気を払う象徴として孔雀明王の名で仏教の信仰対象にも取り入れられています。
- (5) サーンチー仏教遺跡：1989年に世界文化遺産に登録されたインドに残る最古の仏塔です。
- (6) サーンチー仏教遺跡の女神像
- (7) インド細密画：18世紀にインドのラージャスタン州で発達した細密画です。
- (8) インド更紗：粗密のある木綿の生地に媒染模様染というインド更紗特有の技法で模様が染め表されたものです。
- (9) 民族舞踊「バーラット・ナティウム」：インドの代表的な舞踊のひとつです。
- (10) 古典舞踊劇「カタカリ」：インドの四大古典舞踊のひとつで、世界三大化粧劇のひとつとも言われています。「カタ」は物語、「カリ」は舞踊を表します。

2007 年日印交流記念行事

本 2007 年、日印両国はそれぞれ日印文化協定締結 50 周年を記念する文化交流行事を挙行している。
以下「2007 年インドにおける日本年」に関し、

- (1) その趣旨及び基本テーマ
- (2) 実行委員会（及びその事務局）の構成
- (3) 資金面の手当
- (4) 事業全般の構成
- (5) イベント・カレンダー

を紹介する。

1. 趣旨及び基本テーマ

- (1) 2005 年 4 月、当時の小泉首相が訪印し、マンモハン・シン首相との間に日印共同声明に署名。
其の行動計画のひとつとして、「文化・学术交流・人と人との交流の強化」が謳われた。これに基づき、日印文化協定締結 50 周年に当る 2007 年に、日本は官・民・学界が一致協力して各種の文化交流行事をインドで実施することとなった（インド側も、日本において各種文化行事を行うこととしており、インド側については、昨 2006 年 12 月のマンモハン・シン首相訪日期間中に、東京において、開会式典及びショーなどを行い、安倍首相夫妻も出席した。）
- (2) 日本側が考えている基本テーマは「仏教伝来から現代に至るまでの日印の歴史的文化的紐帯とその発展」である。これは時代と距離を超越した精神的文化的な紐帯が歴史的に存在することの意義を再確認するとともに、現代における経済、科学技術を含む両国の協力の重要性を再確認することにある。

2. 実行委員会（及びその事務局の構成）

実行委員会は本件文化交流事業の基本方針の策定と募金活動を行い、募金による事業の実施等を任務とする（事務局を外務省の南部アジア部南西アジア課におく）。委員長は大橋信夫日印経済委員会会長。名誉顧問は森喜朗元総理・日印協会会長。顧問は御手洗富士男日本経済団体連合会会長、山口信夫日本商工会議所会頭、北城恪太郎経済同友会代表幹事、中根千枝東京大学名誉教授及び平山郁夫文化財保護・芸術研究助成財団理事長。

3. 資金面の手当

外務省、文化庁及び国際交流基金のそれぞれの予算によるほか、実行委員会による民間募金に期待する（募金による事業は委員会が主催するものと、「草の根事業」の助成に分けられる）。

4. 事業全般の構成は次のとおり。

- (1) 外務本省、在印大使館及び 3 総領事館の主催の事業
- (2) 文化庁助成の事業
- (3) 国際交流基金主催・助成の事業
- (4) 実行委員会主催の事業
- (5) その他（観光振興など）

なお、本件交流事業については公募により採択されているロゴマークの使用が認められている。



5. 1月からの事業実施状況については下記の実行委員会事務局アドレスにアクセスのうえ、事務局作成(3月現在)の「イベント・カレンダー」及び「連続公演」カレンダーをご覧願いたい。

<http://www.mofa.go.jp/mofa/area/india/jin2007/index.html> (外務省ホームページにアクセスののち、アジア→インドと進むのが便利である)

既に実施済みのものは、何れも、インド側で高い評価を得ており、マスメディアの取り上げ方も好意的であり、成果を上げているとみてよい。

日印交流年イベントカレンダー

(◆は実行委員会による認定を受けた事業)

「日印交流年」実行委員会事務局

2007 年通年	「日印交流年」年間セレブレーション(◆)	チェンナイ	ABK-AOTS 同窓会	日本人形展、盆栽展、生け花展、トレーニング・プログラム等
1月7日～8日	アジア4ヶ国共同製作演劇「演じる女たち－メディア、イオカステ、クリュテムネストラ」	デリー	国立演劇学校(NSD)国際交流基金	日本、インド、ウズベキスタン、イランの演劇共同製作。国立演劇学校の演劇祭に出演。
9日	ク・ナウカによる「王女メディア」公演	デリー	国立演劇学校(NSD)	(国際交流基金助成)
10～21日	「日本の音楽と語り」他(◆)	ケララ州数ヶ所、デリー	JLM セミナー 入野義朗音楽研究所	箏曲演奏、琵琶の弾き語り、ナンギヤールクートウ公演他(写真)
13～16日	嵐祭り(◆)	ハイデラバード	ASA Bhanu Japan Center	(於：ハイデラバード植物園)
中～下旬	現代日本の陶磁器展	コルカタ・ムンバイ	国際交流基金	若手作家の作品を紹介 (6～14日：コルカタ、24～30日：ムンバイ)
30日&31日	日本料理紹介プログラム	デリー(日本大使公邸)	日本料理店「梅の花」、日本大使館	湯葉、豆腐を中心とした日本料理の紹介。(一部、国際交流基金助成)
2月9日	JICA－インド40周年記念行事	デリー	JICA	講演、パネル展示等による JICA 事業広報(於：シャングリラ・ホテル)
10～16日	宝塚 OG レビュー・ショー(ハロー・インディア)	デリー、ムンバイ	日本大使館、ICCR、創樹社	デリー 12日(ケマニホール)、ムンバイ 15日(ネルーセンター・オーディトリウム)(文化庁助成)(33名)
13日	「日印交流年」オープニング式典	デリー(日本大使公邸)	外務省、日本大使館	式典と大江戸助六太鼓講演(森喜朗元総理、大塚信夫実行委員長出席)
13～16日	第17回国際産業・技術展(IETF)	デリー	インド工業連盟(CII) & JETRO	2月14日：Japan Day レセプション(於：メリディアン・ホテル、和太鼓公演)及び、第34回日印経済合同委員会
13～18日	日本風景画展	コルカタ	コルカタ総、日本語会話協会	(於：ビルラ・アカデミー・オブ・アート & カルチャー)

7～15日	大江戸助六太鼓公演	デリー、 プーネ、 チェンナイ	国際交流基金	チェンナイ(7～8日)、 プーネ(10～11日)、 デリー(13～15日)
18～23日	基調講演会(日印 の相互理解)	デリー・ コルカタ	外務省	中根千枝・東京大学名誉教授(20 日:デリー、22日:コルカタ)
18～20日	生け花・盆栽展	コルカタ	コルカタ総・池 坊コルカタ支部	(於: タージベンガル + Academy of Fine Arts)
19、20日	能装束に関する講 演会	デリー	日本大使館	山口能装束研究所(於: 国立演劇 学校アビマンチ劇場、ネルー大学 セミナールーム)
23～24日	生け花展「花を通 じた友好」(◆)	デリー	草月デリー支部	(於: 国際交流基金ニューデリー 日本文化センター)
3月3日	観世流宗家「能」公 演	デリー	外務省、 国際交流基金、 日本大使館、 観世流宗家	観世流 26 世、 観世清和家元 他合計 29 名 (於: シリ・フォート劇場)
8～9日	第4回日印シンポ ジウム	デリー	CII、 日本大使館	
3月9日	日本文化際(◆)	デリー	JNU 日本・韓 国・北東アジア 研究センター	(於: JNU)
10日	第19回全インド 日本語弁論大会 (◆)	デリー	MOSAI	(於: インド国立科学アカデミー)
17日	生け花展示会(◆)	デリー	デリー生け花イ ンター・ナショ ナル	(於: ハイヤット・リージェンシー) (文化観光大臣出席)
3月	インドの花見(◆)	デリー	Anu Jindal 女史 (水墨画研究家)	
22、24日	日本映画祭	コルカタ	コルカタ総、 日本語会話協会	(於: ロータリーサダン)
23日	小野雅子オディッ シーダンス公演 (◆)	デリー	Dr. Sanat Kaul (Delhi Tourism)	インド在住日本人ダンサーによる 公演(於: アシヨーク・ホテル)
2月27、28日	日印文学セミナー (◆)	デリー	JNU 日本・韓国 ・北東アジア研 究センター	(於: JNU)
28、29日	知的交流会議「南 アジアにおける人 間の安全保障」	コルカタ	カルカッタ大学、 東京大学	(於: カルカッタ大学)(国際交流 基金助成)
21日 ～4月1日	多世代の交流によ る参加型日本文化 造形ワークショップ	ベナレス	京都造形美術大 学	(国際交流基金助成)
19日 ～4月5日	第15回アジア漫 画展(アジアの環 境問題)	デリー	国際交流基金	(国際交流基金ニューデリー日本 文化センター)
4月19日 ～22日	インド旅行博 (SATTE 2007) 出 展訪日旅行セミナー	デリー	国土交通省、 国際観光振興機 構	旅行博(会場: Pragati Maidan) 訪日旅行セミナー(会場: 近隣ホ テル)

21 日	日本語クイズ大会、 タレント探し	コルカタ	コルカタ総、 日本語会話協会	(於：バワニプール Education Society)
4 月中	盆栽展(◆)	デリー	インド盆栽協会	(於：モーリヤ・シェラトンホテル)
4 月 30 日	日印観光交流年オ ープニング(日印 観光交流のタベ)	デリー (於：日本 大使公邸)	国土交通省、 日本大使館	観光広報大使である女優、木村佳 乃さんの出演
5 月 5 日 ～ 8 日	子供の日祭り(◆)	デリー	Raj Buddhiraja 女史	(於：国際交流基金ニューデリー 日本文化センター)
5 月 18 日 ～ 7 月 20 日	アジア理解講座 「ファッションが つくるインド」	東京	国際交流基金	全 10 回(於：国際交流基金国際会 議場)
年央	童話「パンタチャ ントラ」出版、南イ ンド津波被災地へ の配付	アンダマン、 ニコバル諸 島	カース・キタブ 基金	日、英、ヒンディー語での出版
8 月 7～10 日	日本紹介週間： 「ハーモニー」(◆)	デリー	タゴール国際学 校	折り紙、学校間日印シンボ、生け 花、書道、映画、日本人学校とのス ポーツ大会
9 月、又は 10 月	アートを通じた日 印友好(◆)	デリー	Mrs. Manisha Gupta	個人のアーティストによる油絵の 展示
9 月	夏祭り(◆)	デリー	ニューデリー日 本人学校	
9 月	生け花デモンスト レーション(◆)	デリー	草月デリー支部	
10 ～ 13 日	茶道デモと茶を巡 る日印交流講演等	デリー	裏千家、 日本大使館	千玄室大宗匠(お茶会、茶道デモ、 茶を巡る日印交流展示と講演等) (於：ビルラ寺院、JNU、日本大使 公邸)
2007 年秋	俳句講演会	デリー、 コルカタ	国際交流基金	(日本文化紹介・文化人派遣)
10 月 6 日 ～ 8 日	アジア 4 ケ国共同 制作演劇「演じる 女たち—メディ ア、イオカステ、ク リュテムネスト ラ」	東京(渋谷)	国際交流基金	日本、印度、ウズベキスタン、イラ ンの演劇共同制作 (於：Bunkamuraシアターコクーン)
10 月～ 12 月	現代日本美術展	デリー、 ムンバイ	国際交流基金	「消失点：日本の現代美術」
10 月 14 日 ～ 20 日	「マクベス——日 韓版」公演(◆)	デリー	NPO 法人日欧 舞台芸術交流会	日本、韓国共同によるシェークス ピア作品の公演(於：国立演劇学 院)
10 月	学校対抗バスケッ ト、サッカー大会 (◆)	デリー	ニューデリー日 本人学校	
26 日～ 28 日	詩歌による日印文 学交流(◆)	デリー	印日文学協会	(題目：「文学的耽美主義を超え て」)(於ハビタット・センター、デ リー大学)
11 月 3、5 日	インド・ニューデ リー寄席	デリー	(社)落語芸術協 会	桂歌丸(会長)、三遊亭茶楽(理事) 他、計 6 名。 India International Center(3 日)、 India Habitat Center(5 日)

11 月	巡回日本映画祭	インド国内	国際交流基金	
時期未定	MARUTI-MOSAI 日印クイズ		MOSAI、マルチ ・ウドヨグ社	
11 月 14 日 ～ 15 日	琉球舞踊公演	デリー	外務省、 日本大使館	制作：国立劇場おきなわ(於： Kamani ホール)
11 月 16 日 ～ 27 日	日本の生活文化・ 伝統工芸「支える 匠の技」展(◆)	チェンナイ とその近郊 都市	江戸職人国際交 流協会	日本の職人による独楽、木版画、つ まみ箸、凧、けん玉、及び、加賀友 禅、和菓子の展示・実演・ワークシ ョップ
11 月	第 20 回北部地域 日本語弁論大会 (◆)	デリー	MOSAI	
11 月 28 日 ～ 12 月 7 日	日本・インド伝統 音楽・舞踊公演 (◆)	デリー、 カジュラホ	創造する伝統実 行委員会	仏教会(声明)と雅楽で構成する 舞楽法会+インド舞踊公演(11 月 29 日、デリー：シリ・フォート劇 場、12 月 1、2 日、カジュラホ：屋外) (オウレ・イベント：9 月 8 日、 MUZA 川崎シンフォニー・ホー ル)
12 月 2 日 ～ 4 日	Japanese KOTO Music ～ 350 年の 歴史の流れから未 来へ～	デリー	沢井箏曲院	沢井比河流・沢井一恵と箏オーケ ストラのアジアツアー(12 月 3 日、 カマニ劇場で公演)(国際交流基金 共催)(16 名)
12 月 13 日 ～ 24 日	インド古典舞踊と 日本文化の融合 「インドの惑星の 神々と日本の 神々」(◆)	チェンナイ、 ムンバイ、バ ンガロール	インド舞踊研究 所：ナーティマ ヤ・マンジャリ・ ジャパン NMJ	インドの舞踊家、音楽家と日本の インド舞踊家、お雛子連、書道家、 現代演劇家によるインド古典舞踊 と日本文化の融合
12 月～翌 2 月	「くまもとアート ポリス」巡回展	インド国内	国際交流基金	熊本県の現代建築プロジェクト 「くまもとアートポリス」による作 品を写真、DVD で紹介

日印交流年「連続講演会」カレンダー（予定表）

「日印交流年」実行委員会事務局

*デリーでの会場は ILC 又は、WWF オーディトリウム

平成 19 年 4 月現在

1 月 22 日、 24 日	「東大寺と盧舎那仏」	デリー (24 日)、 コルカタ (22 日)	森本公誠、東大寺別当 (主催：国際交流基金)
2 月 16 日	「日本に定着したヒンドゥーの神々」	デリー	Dr. ロケッシュ・チャンドラ・イ ンド文化国際アカデミー理事長
4 月 20 日	「インド更紗が東アジア諸国に与えた影 響」	デリー	スジャータ・バルサイ女史(博物 館コンサルタント兼、織物専門 家)
5 月 21 日、 23 日	「インド思想の日本的定着」	デリー、 チェンナイ	前田専學・東大名誉教授(インド 哲学)
6 月 27 日、 29 日	「インド説話文学の日本への導入」	デリー、 プーネ	奈良康明・駒沢大学前総長(イン ド宗教文化史)

7月20日、 23日	「サンスクリットと日本語、カナ文字、悉曇學」	デリー、 プーネ	生井智紹・高野山大学前学長(インド思想、仏教思想研究)
8月17日、 20日	「近代における日印交流：タゴールと岡倉天心の出会いを大いなる契機として」	デリー、 コルカタ	我妻和男・麗澤大学名誉教授(タゴール学)
9月14日、 17日	「日本に伝わったインド音楽と舞踊」	デリー、 チェンナイ	井上貴子・大東文化大学国際文化学助教授(インド音楽：内定)
10月19日、 22日	「海のシルクロードとインド」	デリー、 チェンナイ	辛島昇・東大名誉教授(南インド史)
11月16日、 19日	「二人のボース：チャンドラボースと中村屋のボース」	デリー、 コルカタ	長崎暢子・龍谷大学国際文化学部教授(南アジア近代史：内定)及び、クリシュナ・ボース(チャンドラ・ボース甥の夫人)
12月14日	「ロボットとITソフトウェア、物造りとソフトの文化・製造業を通じた日印交流」等	デリー	鈴木修・スズキ会長

(注) 1月、3月の講演以外は外務省(大使館、総領事館)が主催。